

キャンパス・コラム

残念ながら今年は構内の桜をゆっくり鑑賞する機会がなかった。ゼミの学生諸君と楽しんだ昨シーズンの花見コンパを思い出すことひとしおであった。新学期第一週末、学生時代の寮友の集いが仙台で催されると聞き、いそいそと新幹線の人となった。その頃仙台の桜は満開なのだ。

百余名の旧学生らは旧制高校寮のあった丘の桜花を楽しみ寮歌を歌い続け、思い出話しは途絶えることがなかった。翌朝遅い食事の最中、朦朧とした脳裏に唐突に鮮明な「風景」が浮かんできて驚いた。学生服の友人と二人で、上品な和服姿の麗人に茶を点ててもらっているのである。和菓子と抹茶の味さえ甦ってくるではないか！

なにかに憑かれたように腰をあげ、大急ぎで街路樹の道を「風景」の場所へと向かった。それは、あった。半世紀近い昔のままに。周りは

全部鉄筋建造物だが、それは木造平屋で広瀬川を見ていた。夢の中にいる気分である。門から五メートルたらずの石畳の中程で十分間ほど私は立ち止まっていたようだ。動悸は感じたけれども気持ちは意外と平静だった。ゆっくりと時間を過去へ戻していたのだ。二～三年間に繰り広げられた学生時代の、どの時点にあの「風景」を書き込むべきか。

玄関も、掛け軸と生花を配した床の間も。それらの全てが昔のままである。そのうえ市電の響きでも聞こえてくればもう完璧である。私はかつてと同じ席に座った。時間は停止した。菓子も茶も同じものに思えた。ただし、振る舞ってくれたのはかの麗人ではなく、そのお嬢さんか。

学生時代の思い出の断片も幾度も並べ換えて過ごすこと小一時間。そしてふと思った。ゼミの学生たちだって半世紀後には、今回の私同様に、思い出を拾うかも知れないのだ、と。

広報委員 早川善治郎（文学部教授）

編集後記

現代はアイデンティティの危機が叫ばれている時代だ。個々の人間が社会の中では点のような存在になり、自分自身が何であるかが見えにくくなっている。一方、小学五、六年生の少女は、他人の評価や社会的基準に合わせることなく、自分が何をしたいかを優先し、他人と違うことを気にしない傾向を示す。広告代理店による最近の意識調査でこんな結果が出た。少女は自分に自信を持ち、はっきり好きなもの、言いたいことを伝えていく。そこから「なりたい自分」と素直に向き合うとしていく姿が見える。その点、私たち大学生は「無気力」や「無関心」など、元気がない姿ばかりが目立つ。中大生は就職活動の際、面接でおとなしいと言われているが、原因はこんなところにあるのかもしれない。しかし、大学生は少女より能力的に劣っているわけがない。少子化傾向のために、少女は両親から何でも買ってもらえている、単なる「わがまま」なのかもしれない。わがまま少女と無気力大学生……それぞれ世代で形成する新しい社会は、どんな社会だろうか。（倉田 政美）

Hakumon
ちゅうおう

'99・6月号（第149号）

1999年（平成11年）6月1日発行

発行 中央大学広報委員会

〒192-0393 東京都八王子市東中野742-1

〈編集担当 広報部広報課 ☎0426-74-2146

印刷 泰成印刷株式会社

〒130-0026 東京都墨田区両国 3-1-12

電話 03-3631-8141